

自 己 評 価 書

(令和5年度)

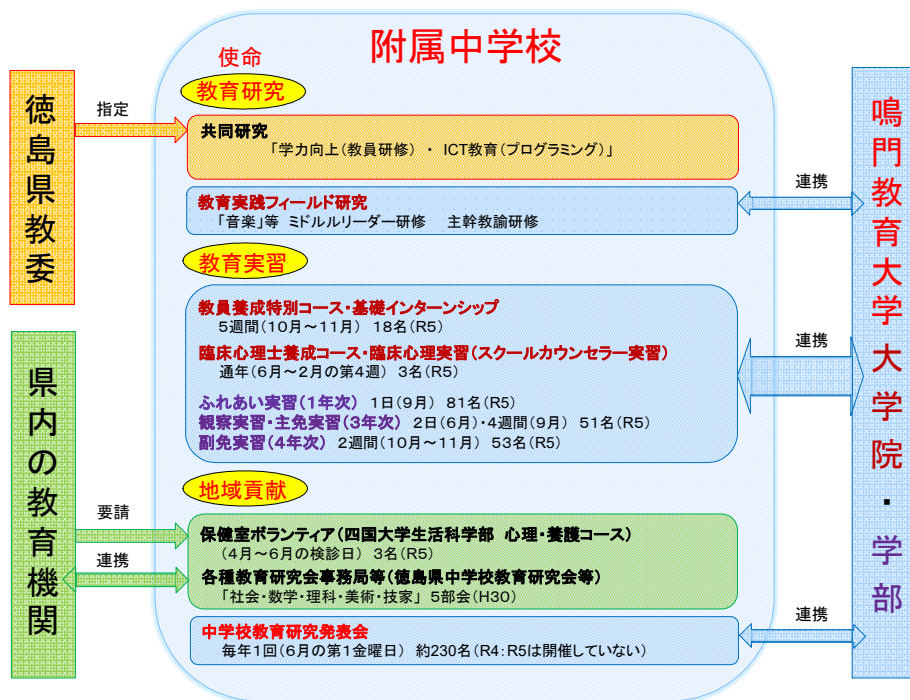
令和6年3月

鳴門教育大学附属中学校

目 次

I	学校の現況及び目標	1
II	重点目標に対する自己評価	2
1	STEAMIC 教育の推進	2
2	いじめの防止	7
3	基本的生活習慣の徹底	11

本校の使命に関する取組状況



I 学校の現況及び目標

1 現況

- (1) 学校名 鳴門教育大学附属中学校
- (2) 所在地 徳島市中吉野町1丁目31番地
- (3) 学級等の構成
 - 1 学年 4 学級 2 学年 4 学級
 - 3 学年 4 学級 計12学級
- (4) 生徒数及び教員数(令和5年5月1日)
 - 生徒数 397人 教員数 25人(正規教員)

2 目標

(1) 目的・使命

本校の目的は、附属中学校校則第1条において「小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すとともに、鳴門教育大学（以下「本学」という。）における生徒の教育に関する研究に協力し、かつ、本学の計画に従い学生の実習等の実施に当たることを目的とする」と定めており、本校は義務教育を行う任務とともに、教員養成大学の附属中学校として、次のような使命をもった学校である。

- ① 大学と一体となって、教育の理論及び実践に関する科学的研究を行う研究学校としての使命
- ② 鳴門教育大学の学部学生の実地教育（教育実習）及び大学院生との教育実践研究等を行う使命
- ③ 教育界の課題の解明に努め、関係機関と連携し、本県中学校教育推進に寄与する使命

(2) 教育目標

本校は、校則第1条に示されている中学校教育の目的の達成のため、次の教育目標を掲げ、めざす生徒像・教師像・学校像を明確に示している。

知・徳・体の調和的人格の完成をめざし、自主・自立の精神、創造的能力、豊かな人間性をそなえ、国際社会の発展に寄与することのできる心身ともにすこやかな中学生を育成する。

めざす生徒像

- 優しく思いやりの心を持ち、人の気持ちのわかる生徒
- 目標を持ち、自主的、創造的に学ぶ生徒
- 強い意思と体をもつと共に、しなやかに生きる生徒

めざす教師像

- 生徒を愛し、生徒とともに伸びる教師
- ゆるぎない使命感、鋭い教育観をもった教師
- 優れた指導力をもった教師
- 強い責任感をもって、何事にも丁寧な対応ができる教師

めざす学校像

- 創造的な知性を磨く学園学校
- 情熱的な意志を鍛える鍛錬学校
- 強健な身体を練る体育学校
- 敬和奉仕の精神に生きる人間学校

(3) 令和5年度重点目標（実践事項）

① STEAMIC 教育の推進

ア 未来を切り拓く資質・能力の育成—教科教育×STEAMIC 教育の探索—

イ 探究心を深め創造力を伸ばして、より高いステージへのアタック

② いじめの防止

ア 相手を思いやり、人の痛みがわかる言動のできる仲間づくり

イ 愛校心を育み、それによって生まれる美しい環境の創造

③ 基本的生活習慣の徹底

ア あいさつをはじめ、丁寧な清掃や時間厳守、そして傾聴できる集団

イ 凡事徹底の上、より高い目標に向かって挑戦し続ける姿勢

(4) 令和5年度評価項目（評価指標）

① STEAMIC 教育の推進

ア 保護者対象アンケート（8月と2月に実施）

イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）

② いじめの防止

ア 保護者対象アンケート（8月と2月に実施）

イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）

③ 基本的生活習慣の徹底

ア 保護者対象アンケート（8月と2月に実施）

イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）

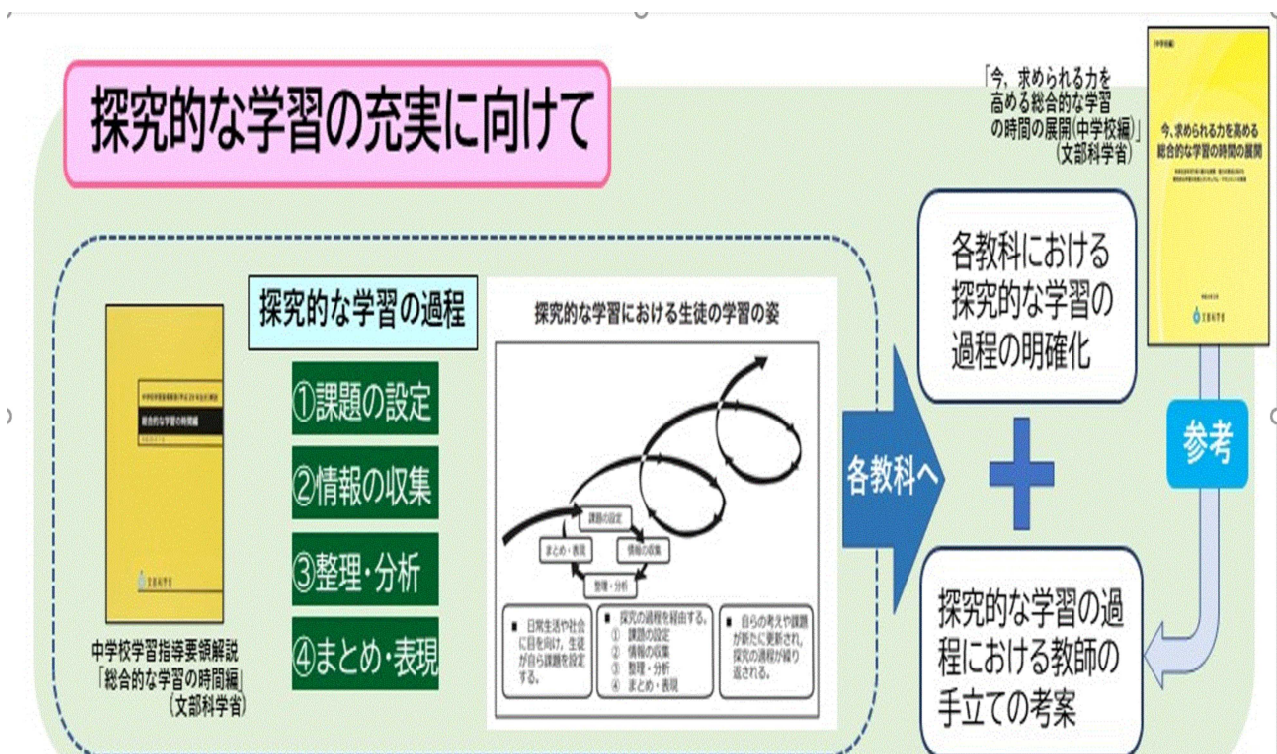
II 重点目標に対する自己評価

重点目標 1 STEAMIC 教育の推進

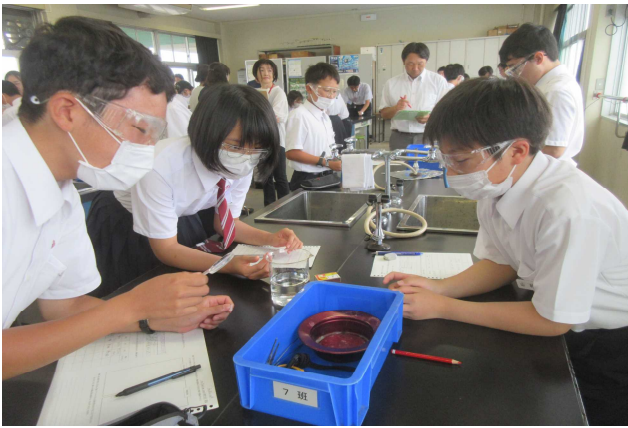
文部科学省では、各教科等の学びを基盤とし、様々な情報を活用しながらそれらを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結び付けていく資質・能力の育成を目的として、STEAM教育等の教科等横断的な学習を推進している。これを受けて、本校でもSTEAM教育を推進していくための研究実践に取り組んでおり、STEAM教育を推進していくために、各教科において、「探究的な学習の充実」に着目し、研究実践に取り組んでいる。そして、それぞれの教科において、探究的な学習を充実させることで、その教科が目指す資質・能力をよりよく育成していくこととあわせて、学習や日常生活等の様々な場面の中で、探究的に学ぶ生徒を育成していきたいと考えている。そのことが各教科の枠を越え、高等学校での「総合的な探究の時間」や「理数探究」でのSTEAM教育に生かされると考えている。

本校では、探究的な学習の充実を図るために、授業実践および授業研究会を実施しており、各教科の授業実践について、「探究的な学習が十分に行われているか」、また「その手立てが有効であるか」などの観点から討議し、研究の成果や課題を明らかにしている。

さらに、授業研究会では教科の垣根を超えた協議が行われ、各教科における探究的な学習に関する研究を一層深化するように、努力している。



(探究的な学習を実践していく構想図)



(理科の実践の様子)



(保健体育科の実践の様子)



(家庭分野の実践の様子)



(技術分野の実践の様子)



(英語科の実践の様子)



(数学科の実践の様子)



(社会科の実践の様子)



(研究委員による指導案の検討)

2 評価項目の状況

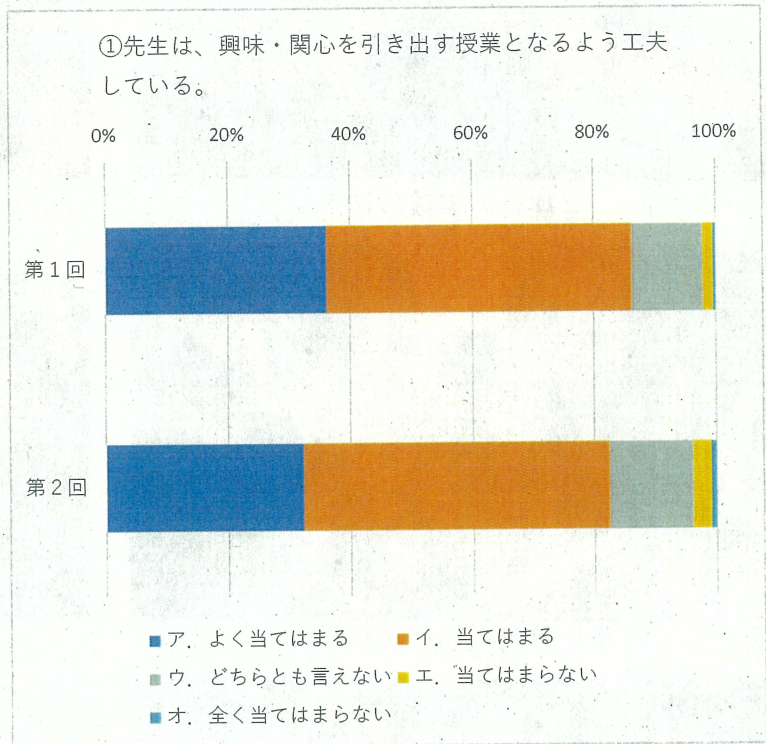
(1)保護者対象アンケート 目標80%以上

「STEAMIC (STEAM for IC) 教育の推進」

①先生は、興味・関心を引き出す授業となるよう工夫している。

第1回 7月 86.4% 昨年度 85.5%

ア. よく当てはまる	36.2%
イ. 当てはまる	50.2%
ウ. どちらとも言えない	11.5%
エ. 当てはまらない	1.7%
オ. 全く当てはまらない	0.4%



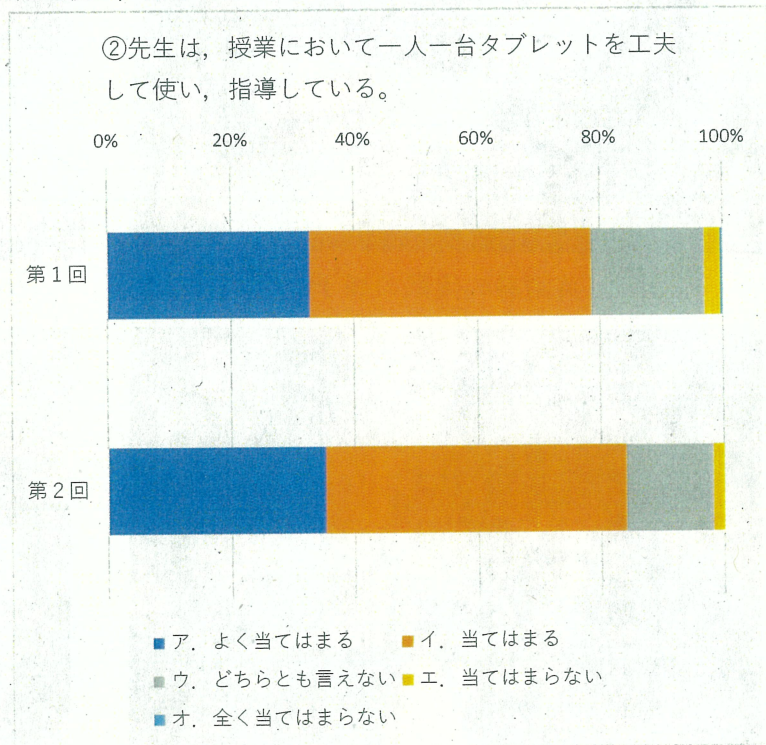
第2回 2月 82.6% 昨年度 82.5%

ア. よく当てはまる	32.3%
イ. 当てはまる	50.2%
ウ. どちらとも言えない	13.6%
エ. 当てはまらない	3.0%
オ. 全く当てはまらない	0.9%

②先生は、授業において一人一台タブレットを工夫して使い、指導している。

第1回 7月 78.6% 昨年度 75.2%

ア. よく当てはまる	32.9%
イ. 当てはまる	45.7%
ウ. どちらとも言えない	18.4%
エ. 当てはまらない	2.6%
オ. 全く当てはまらない	0.4%



第2回 2月 84.3% 昨年度 82.9%

ア. よく当てはまる	35.3%
イ. 当てはまる	48.9%
ウ. どちらとも言えない	14.0%
エ. 当てはまらない	1.7%
オ. 全く当てはまらない	0.0%

(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 未来を切り拓く資質・能力の育成 —教科教育× STEAMIC 教育の探索—

当初申告	最終申告	評価
課題解決学習を充実させるなかで、STEAMIC 教育の推進を通して、主体的・対話的で深い学びを実現する。	探究的な学習に取り組みやすい教材については、生徒は積極的に課題解決に取り組んだが、STEAMIC との関連は薄かった。	B
探究的な活動につながる課題を年間の学習内容の中で新しく開発し、教科の中でSTEAMIC 教育をどのようにおこなうか、明確にする。	新しい題材を開発することができたが、STAMIC 教育についての説明が生徒に十分伝わったかどうかは、これからの教科での取組で実証しなければならない。	B
題材ごとに学びの活用シートや構想シートを作成し、生徒が見通しをもったり振り返りしたりしながら、課題解決を図る授業を行う。	活用シートや構想シートを用いることで、STEAM 教育の推進につながるような探究的な学習の過程を経ながら授業実践が進められた。	A
授業の中で、他教科や社会とのつながりを意識して、STEAM 教育が推進できるよう、探究的な学びを旨とする。	他教科で学んだことを生徒に思い出させながら、そのつながりを意識させることで、多面的な捉えができる生徒が増えた。	A

イ 探究心を深め創造力を伸ばして、より高いステージへのアタック

当初申告	最終申告	評価
難易度別の問題を用意し、生徒の理解に応じて、より高いレベルに挑戦しようとする生徒を増やす。	小テスト等、いくつかの単元で難易度別の問題が用意でき、生徒は前向きに取り組んだが、全ての単元で準備はできなかった。	B
MetaMoJi や Teams のソフトを各単元で効果的に活用し、データ処理を有効に進める。	ワークシートの作成や、作品の記録、資料のまとめ等に有効に生かした。	A
「考える技法」を活用し、ワークシート等を工夫して、思考の可視化を図る。	いくつかのワークシートに「考える技法」を取り入れ、生徒の自己調整力が見取れた。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点 (成果)

- 探究的な学習の過程を明確にして、それぞれの過程の中で、生徒が既習内容と関連付けながら、問題解決を具体的に進めていくことができるようになった。「誰が」「何のために」「なぜ」「どうして」ということを繰り返し問い、考えを詳細に整理させる手立てを講じることで、本題材の目標をよりよく達成することができた。
- 主題を表現するための課題を明確にしたので、見通しをもって集中して制作に取り組むことができた。
- 検証計画を生徒たちに主体的に考えさせることで、その後の授業における観察・実験においても、実験の手順や安全性、効率の良さを意識した言動が生徒に多く見られるようになった。

(2) 改善を要する点（課題）

- 問題解決の方針について、細かく計画を立てたが、細かく立てすぎると、生徒の思考を狭めてしまい、自分で解決することの楽しさを奪ってしまう場面が見られた。これは、生徒の探究的な学習の幅も狭めてしまうことが予想されるので、方針の立て方を検討する必要があると感じた。

- 問題を見いだして課題を設定する場面では、生徒に構想の発散と収束を行ったが、制作方法を先に伝えてしまうと構想の発散が十分に行われぬ可能性があり、後になると思考を発散させたが制作につながるものがでないということもあった。そのため、制作方法を伝える場面については、題材や学年の発達段階によって時期を早めたり、遅らせたりする必要があると感じた。

- 「題材の自由度」が多いほど、生徒から出る多様な考えや意見を受容し、探究的な学習に主体的に取り組ませることができたが、その分時間がかかることや、授業の中で起こる「不確定要素」への対応を考慮しなければならなかった。授業時数や生徒の現状を考慮したうえでバランスをとる必要性を感じた。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

- | | |
|---------|----------------------|
| 自己評価の基準 | A 十分達成されている |
| | B 達成されている |
| | C 取り組まれているが、成果が十分でない |
| | D 取り組みが不十分である |

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

重点目標 2 いじめの防止

いじめは、どこの学校にもあり得るという認識のもと、本校においてもその防止に向けて、早期発見と対応に向けて全校一丸となって取り組んできた。

本校では、年三回実施するいじめに関するアンケート調査等の結果を分析し、取組が適切に行われたか否かを検証し、期待するような指標等の改善が見られなかったような場合には、その原因を分析し、取組内容や取組方法の見直しを行ってきた。具体的には、「ささいな兆候であっても、いじめではないかとの疑いを持って、早い段階から複数の教職員で適切に関わり、いじめを隠したり、軽視したりすることなく、いじめを積極的に認知する」ことを徹底して行った。そして、毎月実施している「生徒指導委員会」において、各学年の状況を共有してきた。相談体制についても、週1回のスクールカウンセラーによる相談が広く浸透し、気軽に相談する生徒の割合も増えてきた。

また、いじめ防止に向けた道徳や特別活動における、教材や活動の工夫については、常に学年ごとに相談しながら同一歩調を進め、授業での様子や授業後の子供の感想等について、学年会を開いて確認しあっている。他にも、年間に三回ほど生徒と担任の二者面談を行い、日々の日記のやり取りだけでは気づかない、子供たちが抱えている悩みや思いを聞くことが、いじめに関しての早期発見にも繋がっている。このように、「附属中学校いじめ防止基本方針」を基に、学年団を中心として組織的に取り組んだ。

そして、安心・安全な学級作りや相手を思いやれる仲間づくりには、体育祭や文化祭をはじめとした学校行事は重要である。昨年5月に新型コロナが5類に移行してからは、本校でも従来通りの行事が、ほぼ実施できるようになった。体育祭における、各学年、クラスの団結力は素晴らしいものがあつたし、文化祭における3年生の劇やダンスは、中学校生活最後の文化祭にふさわしいもので、練習から本番まで有意義な時間を共有できたようであった。



(4年ぶりに復活した入学式の「紙吹雪」)



(文化祭の様子)



(体育祭の様子)



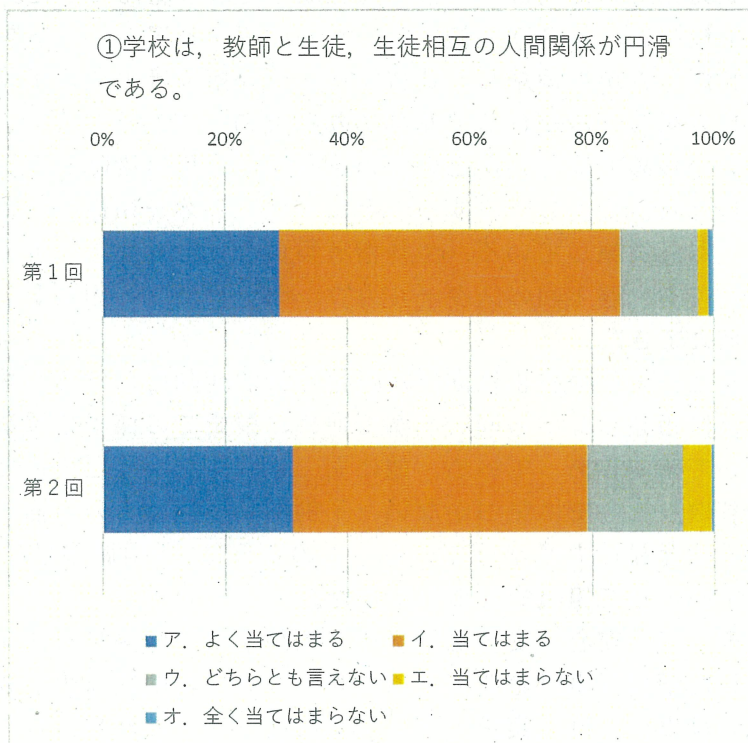
(体育祭「みんなでジャンプ」)

「いじめの防止」

①学校は、教師と生徒、生徒相互の人間関係が円滑である。

第1回 7月 84.7% 昨年度 82.9%

ア. よく当てはまる	28.9%
イ. 当てはまる	55.7%
ウ. どちらとも言えない	12.8%
エ. 当てはまらない	1.7%
オ. 全く当てはまらない	0.9%



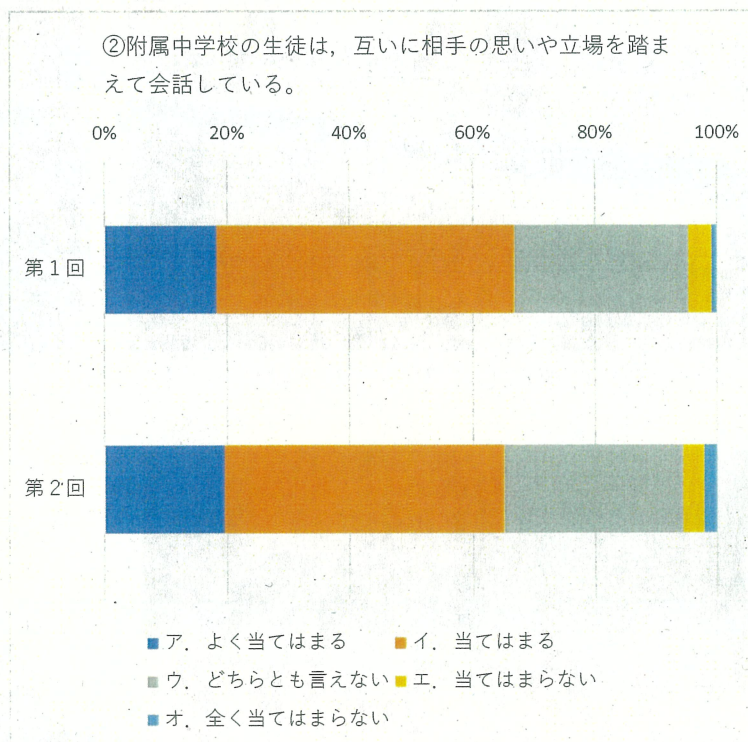
第2回 2月 79.1% 昨年度 77.7%

ア. よく当てはまる	31.1%
イ. 当てはまる	48.1%
ウ. どちらとも言えない	15.7%
エ. 当てはまらない	4.7%
オ. 全く当てはまらない	0.4%

②附属中学校の生徒は、互いに相手の思いや立場を踏まえて会話している。

第1回 7月 66.8% 昨年度 69.6%

ア. よく当てはまる	18.3%
イ. 当てはまる	48.5%
ウ. どちらとも言えない	28.5%
エ. 当てはまらない	3.8%
オ. 全く当てはまらない	0.9%



第2回 2月 65.1% 昨年度 64.5%

ア. よく当てはまる	19.6%
イ. 当てはまる	45.5%
ウ. どちらとも言えない	29.4%
エ. 当てはまらない	3.4%
オ. 全く当てはまらない	2.1%

(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 相手を思いやり、人の痛みがわかる言動のできる仲間づくり

当初申告	最終申告	評価
休み時間や昼休み、教室や廊下を回って生徒の様子を観察や、声かけをしながら生徒同士の良好な人間関係づくりを支援する。	休み時間や昼休みは、できるだけ生徒の近くへ行き、様子を観察や、声をかけることができた。その結果、いろいろな相談をしてくる生徒が増えた。	A
生活記録の提出率 100%をめざし、提出が滞る生徒には声をかけ、必ず、その日の出来事や思いを伝えてもらえる機会をつくっていく。	生活記録がなかなか提出できない者には粘り強く声をかけたが、100%にはならなかった。提出している生徒はいろいろな悩みも書いてきて早期対応につながった。	B
生徒の外見の変化や、友達関係の変化、言葉遣いなどに日頃から気を配り、いじめの予防・早期発見に努める。	教室内での様子を、登校時、昼休みに極力観察するように心がけたが、特別教室での授業のため、休み時間は十分でなかった。	B

イ 愛校心を育み、それによって生まれる美しい環境の創造

当初申告	最終申告	評価
毎朝、子供が来る前に教室へ行き、教室内の環境整備や背面黒板、掲示物に気を配って美しい環境が保てるよう心がける。	毎朝、早く教室に行き環境を整えることはできた。早く来た生徒とは、いろいろな会話を通してクラスの状況も知り得た。	A
清掃活動に力をいれて、分担場所で共に清掃するのはもちろんのこと、清掃を通して、愛校心を高めさせる。	毎日清掃分担箇所に行き一緒に清掃に取り組んだが、積極的に進んで清掃をする生徒は多くはなかった。	B
校門付近で毎日、「校歌」や「附中の歌」を流して、登校してくる生徒を迎え、ボランティア部は掃き掃除をして、子供たちの愛校心を高める。	毎朝、「校歌」や「附中の歌」を流すことができ、ボランティア部も毎日清掃が続けられた。しかし、集会で意欲的に校歌を歌う生徒は多くはなかった。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 毎日の生活の中で、生徒の頑張った点や素晴らしかった言動について、朝や帰りの学活で紹介することができ、子供たちからもクラスメイトのよい言動に注目した意見が出るようになってきた。
- 学校生活アンケートでも、学校が楽しいと思っている生徒の割合や、そう感じて学校生活を送れているようだ、という保護者の意見が増加してきた。
- コロナ禍が続いたため、子供たちが積極的に関わる活動を規制してきたが、5類への移行で、ほぼ従来通りの行事や班活動ができるようになったことへ子供たちからの喜びが伝わってきたし、行事への積極的に取り組む姿がよく見られた。

(2) 改善を要する点（課題）

- 学校を休みがちな生徒や、長期にわたって休んでいる生徒へ、電話連絡や保護者のカウンセリングなどのアプローチは続けてきた。徳島市の適応指導推進施設（すだち学級）へ入級できた者はあるが、十分な改善にはいたっていない。休みがちな生徒に、友達との人間関係が原因という生徒はいないが、更に粘り強く関わる必要性を感じている。
- 休み時間の生徒同士の関わりの中で、軽い気持ちで発した言葉がトラブルの原因になることがよく見られた。中でも1年生は、十分な人間関係を築く前に些細な言動が元で、関係がこじれてしまうこともあったので、人権教育等、心を耕す取組を一層進めなくてはならないと感じた。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

- | | |
|---------|----------------------|
| 自己評価の基準 | A 十分達成されている |
| | B 達成されている |
| | C 取り組まれているが、成果が十分でない |
| | D 取り組みが不十分である |

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

重点目標 3 基本的な生活習慣の徹底

あいさつができる、人の話が聞ける、時間が守れる、掃除を一生懸命する、といった基本的な生活習慣がきちんとできることの重要性や、あたりまえのことをあたりまえにできる「凡事徹底」は、学校生活の基本であり、それができたうえでの学力向上や、仲間づくりであることを全校集会等の機会に伝えてきた。あいさつの大切さは、1日があいさつで気持ちよく始めたい、という思いを共有して朝はさわやかなあいさつを心がけるように、教職員も積極的に子供たちにあいさつをした。校内で出会う外来者も含めたすべての人にも、積極的にあいさつができるよう全校に呼びかけた。

人の話が聞けることについては、授業中に限らず、様々な伝達や諸注意も同様に、そのことの重要性をしっかりと担任を中心に子供たちに語ってもらった。話を聞き逃してしまったばかりに、どれだけ自分が損をするかだけでなく、人にも迷惑をかけてしまっているということを理解させ、義務教育である中学生の間にそれらを身に付けさせたい。時間を守ることについては、朝の登校はもちろん、授業においても5分前着席の徹底を呼びかけた。このような基本的な生活習慣が付いているか否かは今後の人生に大きく影響するといっても過言ではない。あたりまえのことがきちんとできるように、仲間同士で声をかけながら自分を律しながら正していくことは、小学生の頃から言われ続けているであろうが、まだ十分でない者にとっては、中学時代というのは最後のチャンスかもしれないので、自分に厳しく、基本的な生活習慣をしっかりと見直してもらいたい。

清掃活動は、社会に出ると身の回り以外はする機会が減ってしまうかも知れないが、日々頑張る生徒を評価すると共に、子供たちに母校への愛校心をもっともっと芽生えさせて欲しいと教員にお願いした。注意されるからするのではなく、「大好きな附属中学校が汚れていたり、散らかっているのは嫌だ」、という感覚を育てたい。現に毎日部活動で使っている、グラウンドやコートは練習終了後、言われなくても丁寧に整備ができています。これからも「愛校心」を高めることで清掃にも熱心に取り組む生徒を育てていきたい。



(毎朝の登校風景)



(生徒会役員選挙の様子)



(人権の花 贈呈式)



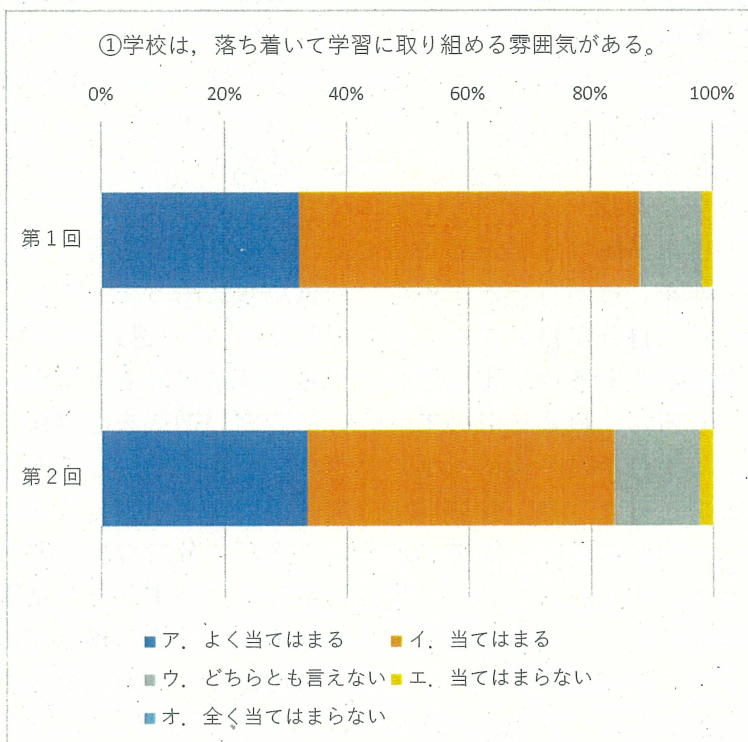
(ボランティアの人たちと一緒に移植)

「基本的生活習慣の徹底」

①学校は、落ち着いて学習に取り組める雰囲気がある。

第1回 7月 88.1% 昨年度 88.8%

ア. よく当てはまる	32.3%
イ. 当てはまる	55.7%
ウ. どちらとも言えない	10.2%
エ. 当てはまらない	1.7%
オ. 全く当てはまらない	0.0%



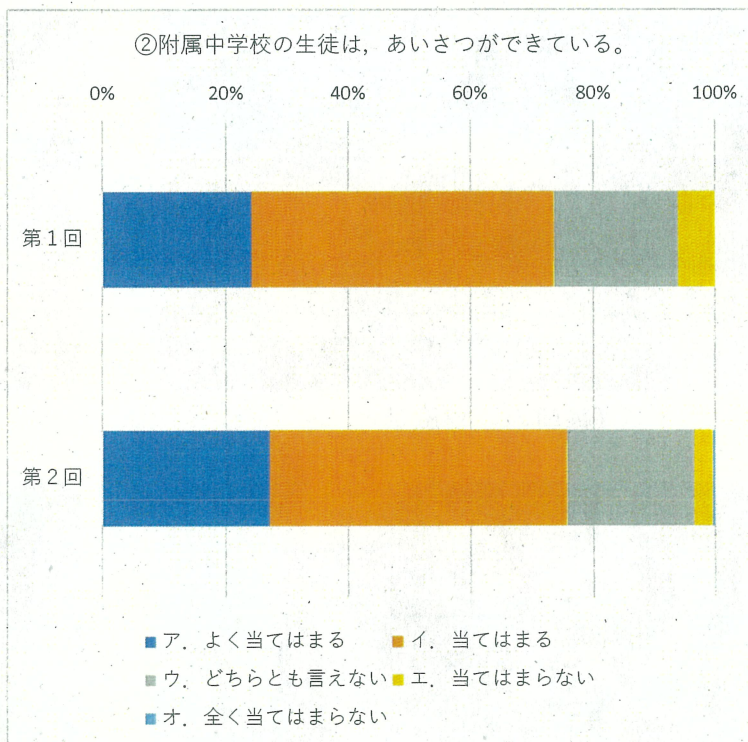
第2回 2月 83.8% 昨年度 82.9%

ア. よく当てはまる	33.6%
イ. 当てはまる	50.2%
ウ. どちらとも言えない	14.0%
エ. 当てはまらない	2.1%
オ. 全く当てはまらない	0.0%

②附属中学校の生徒は、あいさつができています。

第1回 7月 73.6% 昨年度 76.7%

ア. よく当てはまる	24.3%
イ. 当てはまる	49.4%
ウ. どちらとも言えない	20.4%
エ. 当てはまらない	6.0%
オ. 全く当てはまらない	0.0%



第2回 2月 75.7% 昨年度 72.1%

ア. よく当てはまる	27.2%
イ. 当てはまる	48.5%
ウ. どちらとも言えない	20.9%
エ. 当てはまらない	3.0%
オ. 全く当てはまらない	0.4%

(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア あいさつをはじめ、丁寧な清掃や時間厳守、そして傾聴できる集団

当初申告	最終申告	評価
あいさつを徹底し、1日が気持ちよくスタートできるように、クラス全員に意識付けを行う。	毎日振り返りをして、目標達成を目指したが、朝のあいさつは向上したものの、校内でのあいさつは十分ではなかった。	B
人の目を見て、自分から進んであいさつができる習慣を身に付けさせる。	こちらから、あいさつをすればみんな同じように返すことができるが、自分から進んでできる者はまだ少ない。	B

イ 凡事徹底の上、より高い目標に向かって挑戦し続ける姿勢

当初申告	最終申告	評価
時間を厳守して、早く分担場所に出向き、時間いっぱい、ていねいに清掃ができる集団を育成する。	教室以外の掃除場所に行くのが、段々と遅くなる傾向が見られ、その都度声を掛けあってきたが、後期になって素早く丁寧に掃除に取りかけられる生徒が増えてきた。	A
美しい環境を保つことが、子供たちが安心・安全に学校生活を送る基本であることを生徒と常に考えながら、清掃活動にも積極的に取り組ませる。	掲示物がはがれていれば、自主的に直したり、教室のゴミを拾う生徒は増えてきたが、清掃活動への積極的な取組は一部の生徒に限られていた。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 生徒会の幟を持つての毎朝のあいさつ運動の成果もあって、朝のあいさつができる生徒が格段に増えてきた。教室に入る際も、自分からすすんであいさつのできる生徒が多くなり、さわやかなあいさつにより、気持ちのよい1日のスタートとなることを実感できる雰囲気広がってきた。
- 時間の厳守、人の話を聞く、という点においては、子供たちに常に話してきた結果、ほとんどの生徒が実行できるようになった。

(2) 改善を要する点（課題）

- 朝のあいさつや、校内でのあいさつは大分できるようになったものの、関わりの少ない先生や来校者の方にはまだ十分とは言えなかった。
- 清掃活動への取組は、コロナ禍も影響してか、前向きに取り組める生徒が増えたが、まだ、させられているという感じの生徒も見られる。より美しく、工夫した取組ができるように意識を向上させたい。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準 A 十分達成されている
 B 達成されている
 C 取り組まれているが、成果が十分でない
 D 取り組みが不十分である

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

Ⅲ 別添 自己評価根拠資料一覧

	観点番号	資料番号	資 料 名	備考
1	1・2・3	参考資料1	令和5年度学校評価アンケート結果 (保護者対象アンケート集計結果)	資料回収
2	1・2・3	参考資料2	教職員対象自己申告による目標管理自己 評価結果	資料回収
3	1	参考資料3	令和5年度全国学力・学習状況調査結果 (学力調査)	資料回収
4	2	参考資料4	令和5年度学校生活アンケート集計結果	資料回収
5	2・3	参考資料5	令和5年度全国学力・学習状況調査結果 (生徒質問紙)	資料回収